令和７年度
「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
　地域製造業を支えるための次世代デジタル・CAD人材育成モデル開発事業

事業成果報告書

令和８年３月

学校法人穴吹学園

穴吹ビジネス専門学校

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として、学校法人穴吹学園 穴吹ビジネス専門学校が実施した令和７年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果をとりまとめたものです。

目　次

第１章　本事業の概要

１．本事業の概要と目的等　2
２．事業の内容等　5

第２章　令和７年度の活動

１．令和７年度の活動　12
２．事業実施に伴うアウトプット（成果物）　22
３．事業実施によって達成する成果及び測定指標　23
４．本事業終了後の成果の活用方針・手法　25

資料

１．プレ実証講座募集チラシ　27
２．プレ実証講座アンケート結果　29
３．プレ実証講座理解度テスト結果　43
４．プレ実証講座シラバス・コマシラバス　62
５．プレ実証講座教材　83
６．企業アンケート調査報告書　84

議事録

１．第１回プログラム検討委員会　100
２．第２回プログラム検討委員会　104
３．プログラム検証評価委員会　107

第1章　本事業の概要

1. 本事業の概要と目的等について

(1)委託事業の内容

人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム

(2)事業名

地域製造業を支えるための次世代デジタル・CAD人材育成モデル開発事業

(3)構成機関(プログラム検討委員会)

◆教育機関

	名称
1	学校法人 穴吹学園 穴吹ビジネス専門学校
2	学校法人 有坂中央学園 専門学校 中央情報大学校
3	学校法人 龍澤学館 MCL 盛岡情報ビジネス＆デザイン専門学校
4	福山職業能力開発短期大学校
5	学校法人 穴吹学園 穴吹カレッジキャリアアップスクール福山

◆企業・団体

	名称
1	入江株式会社
2	株式会社河原
3	山陽マシン株式会社
4	株式会社グローバル専門人材開発ラボ
5	株式会社ミウラ
6	広島県東部機械金属工業協同組合
7	福山商工会議所
8	府中商工会議所
9	公益財団法人ひろしま産業振興機構

◆行政機関・その他

	名称
1	広島県立総合技術研究所 東部工業技術センター
2	福山市 企画財政局 企画政策部 デジタル化推進課

（4）事業の実施体制

本事業は、関係機関が連携し、PDCA サイクルに基づき継続的な改善を図る体制で運営する。

①計画（Plan）

プログラム検討委員会（教育機関・企業・業界団体・行政で構成）が、事業方針の決定、助言、方向性調整を行う。

②実行（Do）

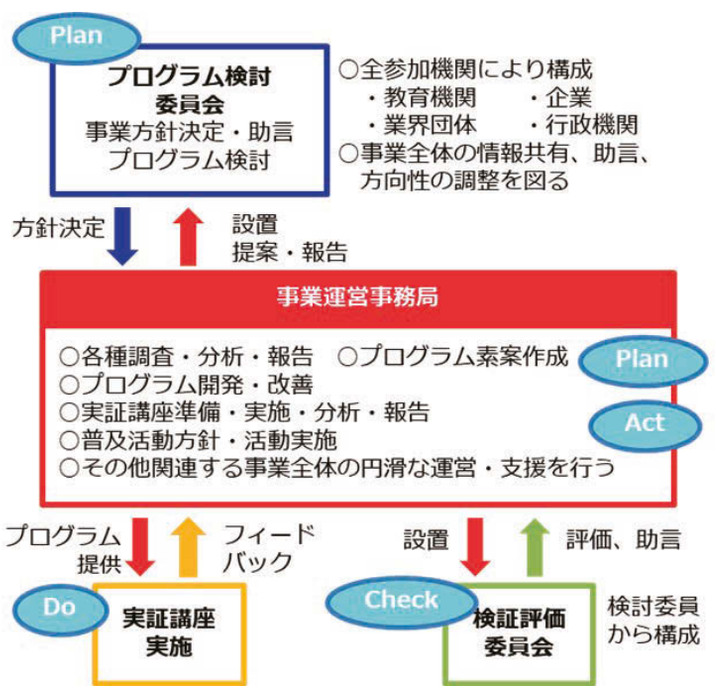
事業運営事務局が、調査・分析、プログラム案作成、開発・改善、実証講座の運営・進捗管理・報告、普及活動等を実施し、プログラムを提供する。

③検証（Check）

実証講座の結果を検証評価委員会に報告し、同委員会が効果検証、評価、改善に向けた助言を行う。

④改善（Act）

評価結果を踏まえ、事業運営事務局がプログラム案を改善し、再度検討委員会で方針に反映させ、次年度以降の計画へ循環させる。



（5）各機関の役割・実際に得られた協力事項について

〇教育機関

・学生の状況等情報提供
・プログラム企画案・設計案等への助言
・学生への動機づけ、学習意欲継続への取組等の助言
・アンケート調査結果や実証結果に対する分析やフィードバック
・プログラム開発、実証授業開催等

〇企業・団体

・業界情報提供、プログラム企画案・設計案等への助言
・現場でのCAD・デジタル活用事例や、必要な技術・知識、活用状況等の助言
・現場課題や業界動向情報等の提供
・アンケート調査結果や実証講座結果に対する分析やフィードバック

〇行政機関・その他

・地域課題や人材ニーズ等の提供・整理
・広報協力（地域への周知、信頼性向上）
・アンケート調査結果や実証講座結果に対する分析やフィードバック

2. 事業の内容等

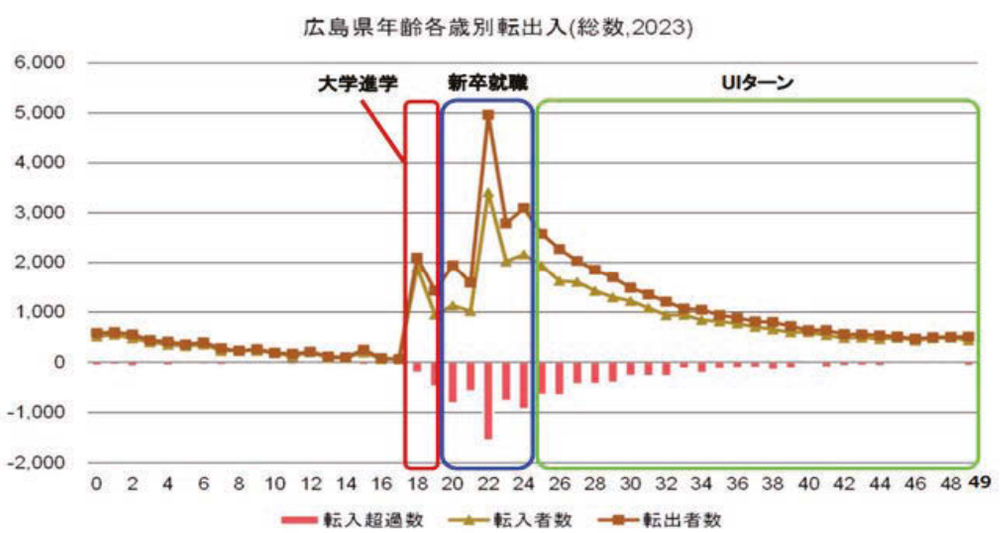
（1）事業の趣旨・目的等について

広島県は 4 年連続で転出超過が全国ワースト 1 位であり、年間 1 万人を超える流出者の 8 割を 10～30 代の若年層が占め、深刻な地域課題となっている。特に卒業と同時に首都圏等へ転出する若者が多く、地元企業が就職先の選択肢に入っていない現状がある。
一方、福山市を中心とする県東部は、製造業が集積し地域経済の柱となっているが、福山市だけでも年間約 3 千人の若者が転出し、深刻な担い手不足に直面している。中でも、製造現場に不可欠な CAD 人材は、熟練技術者による設計ノウハウの属人化や継承困難が深刻化し、業務効率化のためのデジタル推進も不可欠である。
しかし、地域にはこれらの技術を実践的に習得できる教育機会が限定的であり、即戦力となる若手人材の育成が進んでいない。
そこで本事業は、地域産業のニーズと直結した「次世代デジタル・CAD 人材」を育成し、地元定着を促進する教育モデルの構築を目的とする。現場で使用される AutoCAD や、Inventor、SOLIDWORKS 等の実証講座や、業務改善を図るデジタル推進、企業と連携した課題解決型演習を通じて、即戦力となる若手人材を育成する。慢性的な人材不足が続く中、人材確保は喫緊の課題であり、本事業を通じて若者人材の育成と地元定着を図り、今後他地域へも展開が可能な専修学校振興の仕組確立を目指す。

（2）当該教育カリキュラム・プログラム／調査研究が必要な背景について

■18 歳人口の減少と地域人材流出の加速

全国的に 18 歳人口は減少を続けており、今後も急速に減少する見通しである。広島県では特に若年層の県外流出が顕著で、福山市でも多くの若者が卒業後に転出している。
これは、地元に学びや就職の選択肢が少ないと感じていることが一因と考えられる。



（広島県「若年層の社会減少要因調査分析について（概要資料）」より）

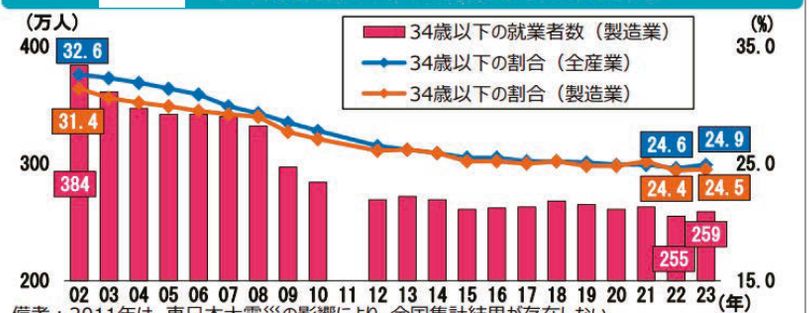
■ものづくり人材の就業動向と課題／人材能力開発の現状

「2024 年版ものづくり白書」によると、製造業の若年就業者数は 2002 年から見て減少して行き、2023 年には 34 歳以下の割合は 24.5%となっている（図１）

また、2020 年時点で製造業従事者の 4 人に 1 人が 55 歳以上となっているデータもあり、今後熟練者の大量退職が予測され、技能・知識の断絶が懸念される。

そのような状況下、人材育成に関する問題点として、「指導する人材が不足している」「人材育成を行う時間がない」などの問題点が挙がっており（図2）、自社で対応の難しい人材育成を地域の専修学校が担うことで、課題解決や地域の発展、人材確保にも繋がっていくと考える。

図1　若年就業者（34歳以下）数の推移



備考：2011年は、東日本大震災の影響により、全国集計結果が存在しない。
資料：総務省「労働力調査」（2024年３月）

図2　製造業における能力開発や人材育成に関する問題点の内訳

指導する人材が不足している	61.8%
人材育成を行う時間がない	46.1%
人材を育成しても辞めてしまう	45.9%
鍛えがいのある人材が集まらない	33.4%
育成を行うための金銭的余裕がない	15.0%

備考：能力開発や人材育成に関する問題がある事業者を100とした割合。
　　複数回答における上位５つの回答。
資料：厚生労働省「能力開発基本調査（事業所調査）」（2023年６月）

■地域における CAD 人材育成の必要性と人材不足の実態

ものづくり産業では若手人材が減少し、熟練者によるノウハウの属人化や高齢化も進んでおり、技能継承の断絶が懸念されている。とりわけ設計や製図を担う CAD 人材は慢性的な人材不足が続き、福山市を含む地域では高い求人倍率が続いている。

こうした課題に対し、専修学校は職業教育の現場として、企業と連携しながら若者の実践力育成を担うことが期待されている。地域ニーズに即した人材育成を進めることで、若者の地元定着や地域産業の維持発展に寄与できるものと考える。

■求められる人材像と専修学校の役割

CAD スキルに加え、製造現場では設計の 3D 化やクラウドによる図面共有、進捗管理などに対応できるデジタル人材の育成が求められている。こうしたスキルには、デジタルリテラシーや協働力が必要であり、国が掲げる「誰もが一定のデジタルリテラシーを持つべき」との方針にも合致している。地域の若年層が産業変革を担うにはこれらの力が不可欠であり、「次世代デジタル・CAD 人材」の体系的・実践的な育成が重要となる。

人材の地域定着には、若者が「学びたい・働きたい」と思える学びの場として、専修学校の存在が鍵となる。専修学校は産業界と連携し、

①地域ニーズに応じた教育モデルの開発

②現場と連携した実践教育の強化

③デジタルと製造を統合したカリキュラム構築

により、選ばれる学びの拠点としての役割を担っていく必要がある。

本プログラムは、「CAD スキル」「業務デジタル化」「地域産業理解」の 3 本柱を軸に、教育と産業をつなぎ、地域の未来を担う若者の育成を図る。

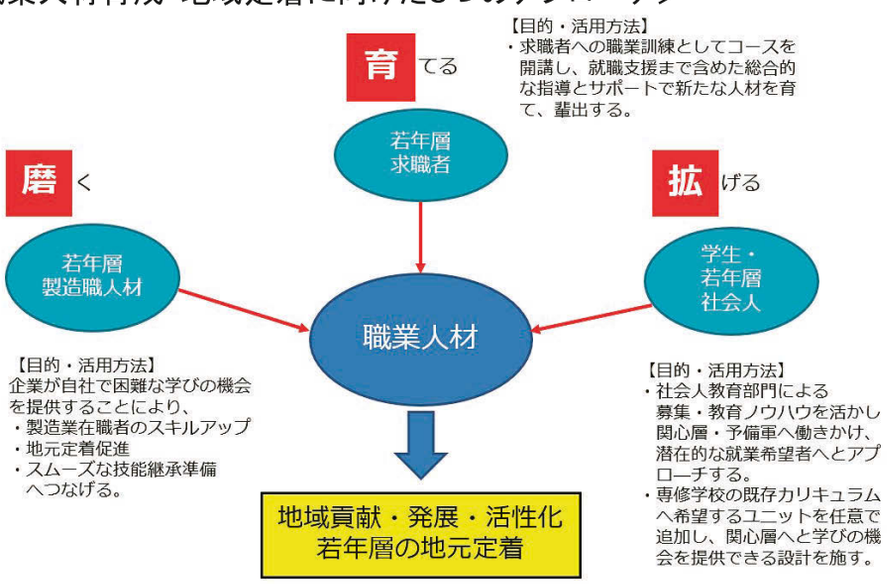
■当事業による職業人材養成と地域貢献

地域産業における人材確保は、単なる一業種の課題にとどまらず、雇用創出や定住促進を通じて、生活インフラや教育・福祉など地域全体の維持に直結する。単純な労働力補充ではなく、「技能が活かせる」「将来に希望が持てる」と若者が将来像を描ける仕事を創出することが、転出抑制や生活満足度の向上につながる。

本事業にて地域産業の担い手不足という喫緊の課題に対応し、デジタル技術と技能の融合による中核人材の育成を通じて、地域雇用の安定と若年層の定着を目指す。

また、育成人材が企業の生産性やサービス向上に寄与することで、住民にとっても安心・利便性の高い地域社会の形成に資する。

＜職業人材育成・地域定着に向けた3つのアプローチ＞



（3）開発した教育カリキュラム・プログラム／調査研究の概要

ⅰ）名称

地域製造業を支える次世代デジタル・CAD 人材育成プログラム

ⅱ）内容

〇開発する教育カリキュラム・プログラム／実施する調査研究の全体像

■調査研究の全体像

「地域製造業における CAD・デジタル人材の現状と育成に関する調査」

本調査は、地域製造業における若手人材の過不足やデジタル技術の導入状況の把握、CAD をはじめとする技能継承や教育機関との連携に対する企業の期待を調査し、教育カリキュラム開発の方向性を明らかにする。また、インターンシップや課題提供等の産学連携の可能性についても併せて確認する。

本調査結果をもとに、地域産業のニーズに即した教育プログラムの開発と、若年層の地元定着を促す仕組みづくりを目指す。（今年度実施）

■開発する教育プログラムの全体像

地域製造業のニーズと若年層の地元定着促進を同時に実現すべく、CAD スキル・デジタルスキルを習得する実践的な教育プログラムを開発し、３年間でモデルの整備・検証を行う。

【１　年　目】 プレ実証講座として、教育手法や人材の入口設計を試行。具体的には、初学者でもデジタルと CAD の両方を全４日で体験できる講座として、30 歳代までの若年層を対象に今年度実施し、当該プログラムを作成した。

【２・３年目】 本格的な実証講座として各科目指導を行うほか、地域企業との連携による課題演習やグループワーク・発表も盛り込み、地元企業との関りや、終了後に即戦力となれる人材の輩出と就職先の地域定着を目指す。

【アドミッションポリシー】

・製造業で働く上で必要な CAD・デジタルスキルを習得し、業務全体の効率・生産性向上を担える力を身に付けたい意欲を持つ人

【カリキュラムポリシー】

・製造業で必要な CAD スキルを体系的に学べる構成とする

・グループワークや PBL（課題解決型学習）を導入し、チーム内での役割や他者との協働を通して知識・技能を伸長させる

【ディプロマポリシー】

・基礎的な製図知識、CAD ソフトを活用した設計スキルを有し、図面の作成・読み取り・修正する能力を身に付けている

・デジタルリテラシーを理解し、ツールの活用が円滑に行え、情報共有や業務の効率化に積極的に取り組む姿勢を有する

■開発の方向性と本プログラムのメリット

学生と社会人（リスキリング・再就職を含む）、2つのターゲットに向けて開発する。
これにより、地域課題への対応、教育内容の焦点、定着・横展開のしやすさ等、それぞれに合った展開が図れ、受講者と地域企業へメリットをもたらすほか、学生・社会人を問わず若年層の取込ができると考える。企業との連携も深め、課題提供・事例紹介・職場見学・実習受入も強化する。
また、単なる講座の実施に留まらず、「他校・他地域でも活用可能な教育モデル」を目指し、指導法・教材・評価方法・企業連携方法等もパッケージ化し、他校展開や社会人向けの教育転用にも資する形で開発を行う。
現在 CAD 学科を有しない学科においても、学科横断型教育や、短期講座形式など柔軟な導入が可能であることを実証し、地域の専修学校の役割拡大と魅力化にも寄与するプログラムを目指す。

観点内容	学生向け	社会人向け
地域課題との対応	若年層の地元定着と職業意識の醸成	製造業の人材不足の解消、女性等の新規参入促進、既存人材の高度化
教育内容の焦点	基礎力養成。 就職時に必要な CAD 基礎、設計知識の体験・習得、業務デジタルツールの導入	実践力養成。 実務直結の 2D／3D CAD 演習、業務効率化ツールによる現場改善力の育成
定着・横展開のしやすさ	専修学校への組み込み・選択制など。 他学科・他校への水平展開も柔軟	一般公開講座・職業訓練・企業研修への流用。 企業ニーズに応じた講座設計が可能。自治体・職業訓練との連携による普及が現実的
普及可能性	学校ネットワークや地域連携校を通じて全国に展開可能	カリキュラムパッケージ化により広域展開も可能。地方自治体等との連携がしやすい
実務家の支援	ものづくり企業や、支援する機関等によるプログラムや事例の紹介、地元製造企業からの課題提供や事例紹介でリアルな視点を加味	

（4）実施計画の全体像

令和7年度	令和8年度	令和9年度
＜調査＞ 企業アンケート調査 ・CAD・デジタルアンケート調査 ・結果のとりまとめ **＜シラバス等開発＞** ・プレ実証講座シラバス等 ・シラバス、コマシラバス ・レジュメ ・受講アンケート ・確認テスト ・実証講座カリキュラム案 **＜実証＞** ・プレ実証講座の開催 **＜プログラム検証・評価等＞** ・プログラム検討委員会の開催 ・プログラム検証評価委員会の開催 **＜報告・成果物＞** ・事業報告書作成 ・Web サイト公開 ・事業 PR 動画作成	**＜シラバス等開発＞** ・実証講座①シラバス等 ・シラバス、コマシラバス ・レジュメ ・教員指導書 ・受講アンケート ・確認テスト ・実証講座カリキュラム ・実証後、カリキュラム改良案作成 **＜実証＞** ・実証講座①開催 **＜プログラム検証・評価等＞** ・プログラム検討委員会の開催 ・プログラム検証評価委員会の開催 **＜報告・成果物＞** ・事業報告書作成 ・Web サイト公開 ・事業 PR 動画作成	**＜シラバス等開発＞** ・実証講座②シラバス等 ・シラバス、コマシラバス ・レジュメ ・教員指導書 ・受講アンケート ・確認テスト ・実証講座カリキュラム（改良） **＜実証＞** ・実証講座②開催 **＜プログラム検証・評価等＞** ・プログラム検討委員会の開催 ・プログラム検証評価委員会の開催 **＜報告・成果物＞** ・事業報告書作成 ・Web サイト公開 ・事業 PR 動画作成

本校が中心となり、教育機関、企業・業界団体・行政機関等と協議の場を設け、地域産業の課題や必要な人材像を共有する。各機関から得た専門知識や実務的知見を取り入れながら、カリキュラム案を作成し、意見交換を通じて内容を調整・改善する。こうした連携により、地域ニーズに即した教育プログラムを構築する。

第2章　令和7年度の活動

1. 令和 7 年度の活動

○実施事項

1. 企業アンケート調査・・・12/12 を回答期限として実施。**詳細は調査報告書参照。**

2. プレ実証講座の開催

■受講者プロフィール等（以下アンケート回答は 9 名）

受講の目的・動機（複数回答）	業種・雇用形態
（人） 6 | [redacted] CAD に興味 5 | [redacted] AI に興味 5 | [redacted] ものづくりに興味 4 | [redacted] スキルアップ 4 | [redacted] 無料だから 2 | [redacted] CAD が必要 2 | [redacted] 就・転職準備	（人） 2 | [redacted] 製造業（役員・正社員） 2 | [redacted] 専門学校生（留学生） 2 | [redacted] パート・アルバイト 1 | [redacted] 求職中 1 | [redacted] 青色専従者（製造業） 1 | [redacted] 高校生
何を見て申し込んだか	**年齢／男女比**
（人） 4 | [redacted] 会社・学校等からの案内 2 | [redacted] 講座チラシ 1 | [redacted] ハローワーク 1 | [redacted] びんごデジタルラボの LINE 1 | [redacted] Instagram の広告	（人） 4 | [redacted] 30 代 2 | [redacted] 20 代前半 2 | [redacted] 20 代後半 1 | [redacted] 10 代 （人） 8 | [redacted] 男性 1 | [redacted] 女性

主な募集手段

・ホームページ掲載　・Instagram 広告　・地域情報誌 2 誌へ記事掲載
・チラシ作成と設置（さんすて内・書店パンフラック・ハローワーク・サポステ等）
・びんごデジタルラボ Web サイト掲載、LINE
・企業アンケート発送時にチラシ同封　・広報部より高校訪問時にチラシ配布

講座詳細ページ

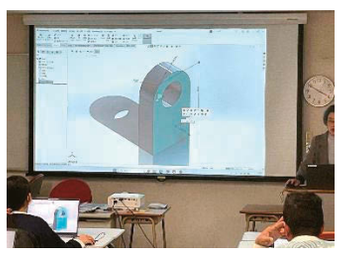
https://www.aef.anabuki.gr.jp/cad/course.html

■実施形態：対面授業

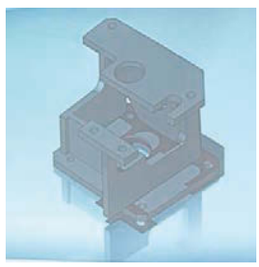
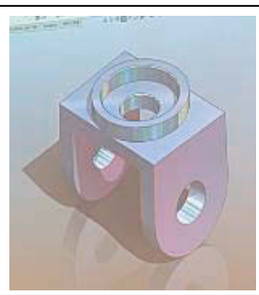
■講座内容：**「はじめてのデジタルものづくり体験講座」（対面・実習）**

【1日目】1/10（土）：AI とクラウド　～アイデアをカタチに～
【2日目】1/17（土）：3D CAD①基本編　～3D の世界を体験～
【3日目】1/24（土）：3D CAD②自由制作①　～デザインを組み立てる～
【4日目】1/31（土）：3D CAD③自由制作②　～完成と共有～

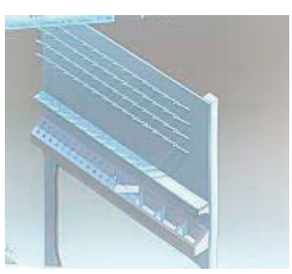
授業の様子


■3D CAD　自由制作　受講生作品紹介





〇事業を推進する上で設置した会議

会議名 ①	プログラム検討委員会		
目的・ 役割	事業運営の計画・実行・評価。 開発・改善に向け意見や助言し事業内容を充実させる。 事業内容や目的について確認及び情報共有し、関係者間での意識のすり合わせを行う。		
会議の 具体的 内容	＜第1回＞　10/30（木）15:00～16:30 開催 ・事業概要、目的、業界動向等情報共有 ・アンケート調査項目について意見聴取 ・プレ実証講座カリキュラム案および募集チラシの確認 ・年間スケジュールの確認　等 ＜第2回＞　2/5（木）15:00～16:30 開催 ・アンケート調査結果の報告と課題・ニーズの整理 ・プレ実証講座実施の報告と効果検証 ・次年度のプログラム開発内容・方向性について		
委員数	１６人	開催頻度	年2回

〇事業を推進する上で設置した会議

会議名 ②	プログラム検証評価委員会		
目的・ 役割	開発したプログラムの実証授業の見学、受講アンケート分析、受講状況、受講の有用性等を評価・分析するために構成する。		
検討の 具体的 内容	◆1/31（土）15:30～17:30 開催 ・実証講座の見学 ・受講状況（理解度テスト・受講アンケート）の確認 ・受講後のスキル・能力の整理 ・講座ニーズの分析 ・評価項目の検討 ・受講後の有用性の評価　等		
委員数	５人	開催頻度	年１回

〇事業を推進する上で実施した調査

調　査　名	「製造業における CAD・デジタル人材の現状と育成に関する調査」
調 査 目 的	地域製造業における若手人材の過不足やデジタル技術の導入状況の把握、CAD をはじめとする技能継承や教育機関との連携に対する企業の期待を調査し、教育カリキュラム開発の方向性を明らかにする。
調 査 対 象	広島県東部・岡山県西部の金属・機械・部品製造業　278 社
調 査 手 法	質問紙法（調査用紙を郵送、回答は Web 回答および郵送の併用）
調 査 項 目	・企業基本情報　・CAD、若手の人材状況　・技能継承状況 ・生成 AI 含むデジタル技術活用状況　・人材育成の課題とニーズ ・教育機関との連携の可能性、企業の期待 ・インターンシップや課題提供等の産学連携の可能性 ・自由記述　等
分 析 内 容（集計項目）	・CAD、若手人材不足の度合い、課題、育成ニーズ ・デジタルツール活用状況、人材ニーズ ・技能継承状況と今後の見通し　・教育機関との連携意欲、要望　等
調 査 結 果	【発送数】278 社（内 5 社未達返送あり） 【有効回答数】41 社（内訳：郵送 16 社（39%）、Web 25 社（61%）） 【有効回答率】15% ＜読み取れる全体像まとめ＞ 本地域の製造業では、以下の状況が明らかとなった。 ・CAD・デジタル活用は進展している ・しかし人材不足・高齢化・属人化が深刻 ・若手の不足スキルは、「CAD 操作」よりも「材料力学・加工知識」、「コミュニケーション」 ・企業単独育成は時間・講師不足で難しい ・外部教育機関への期待が高い ・今後は 3D・DX・AI まで含む複合型人材が必要 **※調査結果詳細は「製造業における CAD・デジタル人材の現状と育成に関する調査報告書」を参照**

＜現状と課題＞

①技能継承の空白化リスク

実態： CAD 担当者が 5 名以下の企業が約 54%。担当者が少ない企業ほど 30 代以下の若手が少ない傾向。

→業務の属人化が進んでおり、ベテランの退職に伴う技術断絶の可能性が示唆される。

②「現場知識」を伴う設計スキルの不足

実態： 若手技術者の課題として「材料力学・加工知識の不足（66.7%）」が最多。

→単なるソフト操作ではなく、製造工程を理解した「設計・製図の基礎力」の再教育に強いニーズがあると考えられる。

③企業単独での育成困難

実態： 依然として OJT（94.9%）が主流だが、研修時間の不足（59.0%）や講師不足（41.0%）が障壁である。

→自社教育のみでは体系的な育成が困難な状況にあり、外部教育機関への依存傾向が
高まっていると推察される。

＜企業ニーズ＞

①教育機関との連携意欲・要望

実態：教育機関との連携について、事業所見学：56.1%、インターンシップ：51.2%、実証講座参加意向（前向き）：68.3%、実践的人材育成への期待：75.6%と、連携意欲は非常に高い水準である。

→特に若手社員育成、設計・製造担当者の再教育を期待する声が多く、学校に対して「実務直結型の外部育成機関」としての役割が強く求められている。

企業が今後学ばせたい内容として、AutoCAD（53.7%）、生成 AI 活用（39.0%）が挙がり、従来の CAD+新しい DX/AI、3D まで含む複合型人材へのニーズ拡大が読み取れる。

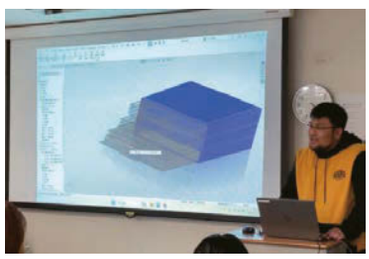
教育機関が企業と連携し、実務に即した「学びの場」を提供していくことが、若年層の技能習得を支え、結果として地域への愛着と定着を促す一助になると考えられる。

開発するカリキュラム・プログラム／今後実施する調査研究にどのように反映するか（活用手法）	・本調査結果をもとに、地域産業のニーズに即した教育プログラムの開発と、若年層の地元定着を促す仕組みづくりへ向けて反映させる。 ・現場密着型、企業連携型教育の必要性を示すエビデンスとして活用する。 【次年度以降の開発プログラムおよび実施案】 ①実践直結型プログラム ・製図＋CAD 操作＋加工知識＋DX 基礎を統合した横断型カリキュラム ・現場課題を題材にした PBL 型学習 ②企業連携強化 ・インターンシップや事業所見学の実施 ・企業課題提供型授業 ・共同講座 ③リスキリング対応 ・若手社員・中途・社会人・留学生も対象 ・短期集中／土曜開催／モジュール制 ④技能継承の仕組み化 ・学校が「地域共同研修拠点」として機能 →専修学校が地域製造業の人材育成ハブとなるモデル構築を目指す。

○開発に際して実施した実証講座の概要　※検証結果については、下記検証項目に記載

実証講座の対象者	今年度実施：【プレ実証講座】 30 歳代までの若年層（学生・社会人）
期間（日数・コマ数）	1コマ 90 分・1日 4 コマ×全 4 日（1 日 6 時間×4 日＝全 24 時間） 土曜日開催 【日程】1/10,17,24,31　各 10:00～17:00（休憩 1 時間）
実施手法	実施形態：対面授業 講座内容： **「はじめてのデジタルものづくり体験講座」（すべて対面・実習）** 【1日目】AI とクラウド ～アイデアをカタチに～ 【2日目】3D CAD①基本編 ～3D の世界を体験～ 【3日目】3D CAD②自由制作① ～デザインを組み立てる～ 【4日目】3D CAD③自由制作② ～完成と共有～ ※講座詳細ページ https://www.aef.anabuki.gr.jp/cad/course.html 

実証結果	【1日目】AIとクラウド ～アイデアをカタチに～ **◆講座に対する満足度** Google Workspaceの連携機能やGemini、Canvaの体験に対し「刺激的」「面白かった」との声が多く、全体として極めて高い満足度が確認された。 **◆スキル習得度・理解度** 生成AI（Gemini/NotebookLM）による効率的なデータ抽出や、Canvaを用いたスライド・チラシ作成など、実務に直結する具体的な操作への理解が深まった。 **◆継続した勉強意欲** Canvaでの動画制作や、Google Workspaceの実務応用、さらにはIllustrator・Photoshop等の専門ソフトまで、多岐にわたる継続学習への強い意欲が示された。 **◆総 評** 「知らないことばかりで学びになった」という声に象徴される通り、最新ITツールの有効性が十分に伝わった。一方で、社会人の受講負担を考慮した「半日開催」への要望や、3DCAD（SOLIDWORKS）との分離開催といった、運用面での改善示唆も得られた。 【2日目～4日目】3D CAD①～③ **◆講座に対する満足度** 「自分の想像が形になる過程に喜びを感じた」「難しいイメージが直感的なものに変わりハードルが下がった」など、未経験者からも高い満足度が示された。 **◆スキル習得度・理解度** 限られた時間の中で「3DCADの基礎的な一歩目が理解できた」という、確かな手応えがあり、製品を3Dで捉えることで完成図をイメージしやすくなる実感を伴った習得が確認された。 **◆3DCADに対する意識変化** 「難しいイメージがあったが直感的でハードルが下がった」「ゲームの感覚に近い」といった意見があり、操作体験を通じて3DCADへの心理的障壁が大きく解消された。 **◆習得の喜びと達成感** 「想像するものが出来上がっていく過程に喜びを感じた」「難しい所もあったが楽しく学べた」など、ものづくりのプロセスに対する高い満足感と達成感が示された。 **◆継続した勉強意欲** 「3Dプリンタでの活用」や「来年からの本格的な学習」に向けた意欲に加え、デザイン系・設計系の職種への就業を具体的に志すなど、将来に向けた強い学習意欲が示された。

	◆総 評 未経験者にとって「楽しく学べる」内容であったことが、製造業や設計業務に対する心理的障壁を大幅に下げる結果となった。短時間ながら「基礎の一歩目」を確実に習得した実感が、自身のキャリア形成においても3DCAD が有力な武器になると確信させ、地域産業への興味を深化させる極めて有効な機会となったと考えられる。 **※受講アンケート結果詳細はHPの「プレ実証講座報告書」を参照**   留学生も受講　　作品発表の様子
受 講 者 数	最大11人 （うち正規課程在学者 2 人、社会人 8 人、その他 1 人（高校生））

○開発した教育カリキュラム・プログラム／調査研究結果の検証

■開発プログラム：「はじめてのデジタルものづくり体験講座」

■検証方法： 実証講座の開催、受講者からの評価
【内訳】①受講アンケート ②理解度テスト ③授業見学 ④検証評価委員からの評価

■評価：
①・②・・・結果詳細は「プレ実証講座報告書」を参照
③・④・・・以下参照

【プログラム検証評価委員による評価・提言】

1. 学習モデル・教育効果について

・**3D CAD の導入優位性**: 2D 図面と違い立体で把握できるため、初心者でもハードルを下げる入り口として最適である。
・**「目的先行型」の評価**: 「作りたいもの（椅子や車など）を決めてから、必要な操作を調べる」という流れが、高い熱意と習得速度を生んでいる。
・**エントリーモデルの継続**: 専門講座とは別に、未経験者が「自分にもできる」と実感できる今回のような入門編を常設すべきである。
・**意欲の喚起**: 色や光沢を付けられる視覚的な楽しさが、設計に興味がなかった層（文系学生など）を惹きつける武器になる。

2. AI リテラシーについて

・**ハルシネーション（誤情報）への警戒**: AI は専門的な内容や要約で嘘をつく。回答を鵜呑みにしない「人間による検証能力」の教育が必須である。
・**業務効率化の実感**: 企画資料やメール素案作成において、数時間の作業を数分に短縮できるツールとしての有効性は極めて高い。

3. 運営・集客面での改善案

・**スケジュールの細分化**: 1 日 6 時間の拘束は社会人や学生にも重い。半日単位（土曜午前のみ等）に分割し、日数を分散させるべき。
・**実施時期の最適化**: 1 月以降は企業の繁忙期や予算策定と重なり集客が難しいため、受講生が集まりやすい 10–12 月を主軸にする。（学生アルバイトや留学生の日本語力も考慮）
・**広報の視覚化**: チラシには、実際に作成した画像や 3D プリンタで出力した作品写真を掲載し、受講後の成果をイメージさせる。

4. 実務・キャリア接続への要望

・**設計知識の補完**: ソフトの操作だけでなく、現場で不足している「材料力学」「強度計算」「加工の知識」を中級以上の講座に盛り込むべき。
・**就業への導線**: 講座体験で終わらせず、企業見学やインターンシップとセットにすることで、実際の雇用に繋げる仕組みが必要。
・**ターゲットの拡大**: 人材不足解消のため、年齢制限（30 代まで）を緩和し、意欲の高い 40 代以上の受け入れも検討の余地がある。

◆総括

本体験講座は、デジタルものづくり人材の裾野を広げる「エントリーモデル」として有効であることが実証された。次年度は、実務に必要な基礎知識の補完と、社会人が参加しやすい運営体制の構築にも重点を置き、プログラムをブラッシュアップさせていく。

■今後のステップ・結果の活用

1. カリキュラムの高度化と適正化

プログラムは、AI・デジタルと CAD を独立させて再編し、それぞれの専門性を深める。
・操作だけでなく、図面や材料力学等の実務知識も補完する。
・「学生向け」と「社会人向け」を分ける。学生は通常の授業とあわせて負担にならないよう「プラスアルファ型」とし、社会人は参加しやすいよう半日単位の開催や、実務を想定した内容やソフトを検討する。「入り口」としての体験講座は残す。

2. 企業連携による実践的キャリアパスの提示

・企業による講話や事業所見学、インターンシップ等を組み込む。

3. 地域連携による「デジタルものづくり」システムの構築

・産学官が足並みを揃え、地域全体で中核人材を育てる土壌を醸成する。

2. 事業実施に伴うアウトプット（成果物）

【令和7年度】成果物	【令和8年度】成果物	【令和9年度】成果物
①企業アンケート調査・報告書 （CAD とデジタル人材について、企業の求める人材・スキル、導入状況、必要度等） **②プレ実証講座報告書** （使用教材、シラバス、コマシラバス、受講アンケート結果等、プレ実証実施に関わる各成果物と報告書） **③事業成果報告書** 当年度の実施内容をすべてまとめ、専門学校等へ送付し事業普及へ活かす。 **④Web サイトでの活動報告** 事業内容、各種報告書等すべてWeb 公開し、自由に閲覧できるようにする。 **⑤事業 PR 動画** 実施内容等をPR 動画にまとめ、Web 公開することで取り組みの早期普及を図る。	**①実証講座カリキュラム等** （製図／2DCAD／3DCAD 基礎／DX 活用を予定） **■シラバス** シラバス・コマシラバス一式 **■授業教材** 補助レジュメ 確認用テスト **■受講者アンケート** 学生用／教員用 **■教員用指導書** **②実証講座報告書** **③モデルカリキュラム案** 当年度実施した内容を元に次年度実証予定のカリキュラム案をまとめる **④事業報告書** 当年度の実施内容をすべてまとめ、専門学校等へ送付し事業普及へ活かす。 **⑤Web サイトでの活動報告** 事業内容、各種報告書等すべてWeb 公開し、自由に閲覧できるようにする。 **⑥事業 PR 動画** 実施内容等をPR 動画にまとめ、Web 公開することで取り組みの早期普及を図る。	**①実証講座カリキュラム等** （2DCAD／3DCAD 応用／DX 活用を予定）※前年からブラッシュアップ+α **■シラバス** シラバス・コマシラバス一式 **■授業教材** 補助レジュメ 確認用テスト **■受講者アンケート** **■教員用指導書** **②実証講座報告書** **③開発モデルカリキュラム** これまでの実証結果を元に、開発モデルカリキュラムをまとめる **④事業成果報告書** 当年度の実施内容をすべてまとめ、専門学校等へ送付し事業普及へ活かす。 **⑤Web サイトでの活動報告** 事業内容、各種報告書等すべて Web 公開し、自由に閲覧できるようにする。 **⑥事業 PR 動画** 実施内容等を PR 動画にまとめ、Web 公開することで取り組みの早期普及を図る。

3. 事業実施によって達成する成果及び測定指標

KPI（成果測定指標）		単位	事業開始前	令和7年度	令和8年度	令和9年度
【必須】取組の普及・展開を行った団体数	目標値	団体		30	30	50
	実績値	団体		未		
	達成度	%				

（上記 KPI の測定手法）
Web サイトでの公開及び、報告書を近隣エリアの専門学校へ送付、令和8年度はさらにエリアを広げて実施報告を行う。

KPI（成果測定指標）		単位	事業開始前	令和7年度	令和8年度	令和9年度
プログラム実証講座の受講人数	目標値	人		20	20	20
	実績値	人		10		
	達成度	%		50		

（上記 KPI の測定手法）
モデルの妥当性を検証するための母数確保に 20 人以上とする。対象は若年層とし（30 代までを想定）、令和 7 年度はプレ実証として 1 月～2 月開催予定、令和 8 年度～9 年度は、早いコースで 10 月以降開催見込。

KPI（成果測定指標）		単位	事業開始前	令和7年度	令和8年度	令和9年度
実証講座受講者の満足度・理解度	目標値	%		80	75	80
	実績値	%		100		
	達成度	%		125		

（上記 KPI の測定手法）
講座終了後に受講者へアンケートを実施し、満足度や理解度を測定する。受講スタート時の各受講者レベルにより、難易度が高く感じる方がいる可能性もあるが、最終年度は 80%以上を目指す。

KPI（成果測定指標）		単位	事業開始前	令和7年度	令和8年度	令和9年度
実証講座の修了率	目標値	%		90	80	80
	実績値	%		100		
	達成度	%		111		

（上記 KPI の測定手法）
受講者の初回から最終日までの出欠を確認し、修了率を算出する。特別な事情を除き、ドロップアウトすることの無いよう最後まで継続受講できるプログラムを目指す。（初年度が高いのはプレ実証のため）

KPI（成果測定指標）		単位	事業開始前	令和7年度	令和8年度	令和9年度
実証講座受講者の知識・技能習得度	目標値	点		80	70	80
	実績値	点		79		
	達成度	%		99		

（上記 KPI の測定手法）
講座中または終了後に確認テスト等を行い、最終的に 80 点以上が取れるよう、指導方法や教材等改善を図る。

KPI（成果測定指標）		単位	事業開始前	令和7年度	令和8年度	令和9年度
地域展開連携機関数	目標値	社		1	2	3
	実績値	社		0		
	達成度	%		0		
（上記 KPI の測定手法） 講話、共同企画、職場見学、実習受入等、当事業に協力いただける連携企業数。						

KPI（成果測定指標）		単位	事業開始前	令和7年度	令和8年度	令和9年度
他地域での導入検討団体数（問合せ・導入があった件数）	目標値	校		－	－	3
	実績値	校		0		
	達成度	%		－		
（上記 KPI の測定手法） 本プログラムを他地域での導入候補として検討および導入する学校・団体等の数 3 以上を目指す						

＜令和7年度結果＞

- **受講人数と連携機関数（達成度：低）**

令和７年度は「プレ実証」という位置づけであり、１月開講という年末年始をはさむ時期で募集期間も限られていたことも要因と推察する。しかし、少人数（10 名）での　実施により、次年度の本稼働に向けた質の高いモデル検証を行うことができたと考える。

- **満足度・理解度・修了率（達成度：高）**

満足度および修了率は 100%と高い成果を収めた。都合により最終日のみ欠席となった方はいたが、ドロップアウトすることなく全員が完走したと言え、プログラムの構成（AI・3DCAD）が受講生の興味・ニーズに合致していた裏付けになるのではないかと考える。

- **知識・技能習得度（達成度：概ね達成）**

目標 80 点に対し、実績 79.2 点（達成率 99%）と概ね目標を達成した。 AI/クラウド科目では目標を大幅に上回ったが、3DCAD　では専門用語の難易度から点数が伸び悩む結果となった。受講者も実際の操作に意識が偏っていたのではないかと思われるが、次年度の改善に向けた貴重な指標となった。

4. 本事業終了後の成果の活用方針・手法

事業終了後は、地域内外へ開発プログラムを紹介し、普及に努める。
まずは、プログラムや成果物は Web 公開し、参考いただけるようにする。また、要望があれば随時個別にてメール等での質問対応も行う。

■継続活用
・教材・カリキュラム・運用ノウハウをまとめ、次年度以降の継続実施体制を整備する。
・実証後に地元製造業へ就職となった方がいた場合は、その後のプログラム活用度や定着について成果の確認を行う。
・社会人教育部門から、「地元企業の声を反映した講座」として一般講座開講する。
・学生、若年社会人、主婦や外国人留学生も対象に、誰でも学び直しできるプログラムとし、地域人材育成に活用する。
・都市部に進学・就職せず、「地元で学び地元で働く」流れをつくる。地元企業の求人は受講生へ積極的に案内する。
・受講者として学んだ者が、今後指導者となるきっかけづくりとしても期待が持てる。

■行政・産業界との連携
・地元自治体や商工会議所等と連携をとり、地元企業からの受講希望者の紹介や、企業へ人材の供給をおこなう等、地元定着へ向けて人材循環支援体制を検討する。

■地域への普及・横展開
・プログラム検討委員の協力を得て、企業や行政、団体からも周知いただく。
・Web サイトに事業内容や成果物、PR 動画等を公開し、事例発信を行う。
・製造業が集積する他地域へ成果報告書も送付し、事例紹介する。

